



Title	イラン人生活の諸相
Author(s)	勝藤, 猛
Citation	大阪外国語大学学報. 1974, 32, p. 41-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80529
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イラン人生活の諸相

勝 藤 猛

・ کتاب علوم اجتماعی برای چهارم دبستان از دو جهت دارای اهمیت است . یکی از جهت مطالب آن که زندگی گوناگون ایرانیها را بطور روشن و مفصل نشان میدهد و چیزهای مهمی از جغرافیای ایران در آن پیــــدا میشود .

・ دیگر از جهت انشاء آن است . فارسی که در آن کتاب بکار برده شده خیلی ساده و مفهوم همه کس می باشد و بخصوص دانشجویان خارجی با سانی میتوانند بخوانند و بنویسند .

・ به عقیده من آن کتاب یکی از بهترین متن فارسی برای خارجیان می باشد . من سعی نموده ام که چند درس از آن را به زبان ژاپنی ترجمه و تفصیل کرده و مطالب سودمند و انشاء آن را به ژاپنیها معرفی کنم . این طور مطالعه اساسی هنوز در ژاپن مرسوم نشده است .

تاكشی کاتسوفوجی

序

イラン暦1341年（西暦1962—63年）発行の小学4年用社会科教科書は有益にして興味深い教科書である。発展途上国であるイランにおいては「文盲との闘争」が国王モハンマド・レザー・シャーの重要な政策の一つとなり、そのための措置がとられてかなりの効果をあげつつある。たとえば文盲の成人男女に小学校程度の国語教育を施すことである。この小学校程度の国語教育なるものは、この国の教育水準から考えて、決して初歩的なものでなく、むしろかなり高い水準を示すものといえる。とくに小学4年までの国語の能力はイラン人の教養の水準をなすものである。2年用の国語教科書に早くも古典叙事詩「シャー・ナーメ」（列王紀伝）が出てくるほどである。

それにまたわれわれ外国人がペルシア語を学ぶ場合、小学4年程度のペルシア語の読み書き会話が十分にできれば、外人のペルシア語としてはかなり高い水準、つまりイラン人に対してもあまり見劣りのしない程度に達したものである。したがってここにペルシア語・ペル

シア文化の分野での研究対象として小学4年の教科書を取りあげることが、程度が低きに失することはないと考えられる。

この書物が有益にして興味深い理由はふたつの面から考察することができる。一はその内容であり、二はその文体である。まず内容について述べる。以下に訳注するのは本書の一部分であるが、そこにはイラン人の生活のいくつかの様相がいきいきと描かれている。そのほとんどはイラン人にとって常識的なことであり、日本人にとってはなじみのないものである。

まず牧夫の生活がある。これはいわば日帰りの遊牧民である。村人の家畜を預かり、毎朝山岳地方の放牧地へそれを連れて行って草を食わせ、夕方には村へ連れて帰るのである。牧夫はこの仕事によって賃金を得るのであるが、その社会的経済的地位は農民より低い。

つぎに説明されるのは、牛を飼い、その乳を搾り、それを町で売り、その牛乳が、牛乳またはヨーグルトの形で消費される過程である。牛乳はその殺菌や保存の設備がまだ十分に普及していないため、牛乳のまま飲用されるのは大都市だけで、多くはヨーグルトまたはチーズの形で消費される。

三番目の場面はイラン人の主食たるパンのもとである小麦を作る農民の労働と生活である。ここで特記しておかねばならぬことは、イランのような乾燥地帯では、小麦の栽培にも灌漑を必要とすること、農地改革が実施されているにもかかわらず、地主と小作人との経済的社会的格差は依然として甚だしいこと、それにこの教科書が発行されてから10年ほど経た現在、農業の機械化が急速に進み、農村に役牛の姿がほとんど見られなくなったことなどである。

最後に荒野の生活が述べられる。この荒野こそ日本人にとってもっともなじみの薄いものである。一見それは一木一草もなく、動物も棲息しない死の世界のように思える。しかし決してそうではない。そこにも植物が生え、動物が住み、その一部には人間も生活している。それは季節によって色彩を変える。荒野もまさしく生きているのである。そのさまざまな様相が詳細に魅力的に描写されて、荒野について日本人の蒙を啓いてくれる。

つぎにその文体についていうなら、かなり口語的であり、平明な文体である。一般にペルシア語の書き言葉は内容よりも文体に重きをおくようにすら感じられるが、本書のペルシア文はその充実した内容をわかりやすく伝えようとする作者の意図がうかがわれて好ましい。平明な文体であるだけに、非ペルシア語国民が模倣するに便利で、この程度のペルシア文を使いこなせることが、われわれ日本人ペルシア語学習者の目標であろう。

本書の内容と文体とから推測されることは、本書の執筆者は複数であろうということである。詳細にして具体的な内容を提供する人と、それをペルシア文で表現する人と、この両者が緊密な協力をもって製作したのがこの教科書である。多くのペルシア文が文体に重きをおきすぎ、より内容を求めるわれわれ外人読者に不満を覚えさせることがあるのに反して、本書は内容的に充実して読みごたえのあるものとなっている。

注釈には、辞書を引けば容易にわかるものや、文法の初歩的なものは省いた。本学第3課程の講読の程度である。この基礎的研究が日本のペルシア語・ペルシア文化研究の土台の一部となれば幸いである。なおこの教科書は現在は絶版で使用されていない。

I 山麓の生活

1. 牧夫と番犬

対頁の絵をよく見てください。羊と子羊と山羊¹⁾ が草を食べている²⁾ のが見えるでしょう。かれらは草を得るために低地から上ってきて、いま山の上に着いたところです。石の上に腰をおろしている男は牧夫³⁾ です。かれの名前はハサンですが、村の人びとはかれをハサニー⁴⁾ と呼んでいます。家畜の群⁵⁾ が草を食べているとき、ハサニーは羊や小羊の番をします。

この山地に牧夫はかれひとりです。自分の家からとても遠いです。かれは家畜の群を見守り、山羊や羊や小羊がみんなよく草を食べるように注意しなければなりません。

ハサニーの横に坐っている犬は番犬⁶⁾ で、バブリー⁷⁾ という名をもっています。ハサニーの主人⁸⁾ が、バブリーがまだ小犬⁹⁾ であったとき、かれに贈り物として与えた¹⁰⁾ のです。ハサニーはその小犬を家に連れて帰り、それを育てて¹¹⁾ 自分の手助けをするようにしました。番犬はどんな仕事ができると思いますか。もう一度むかひの絵をごらんください。羊の数をかぞえることができますか。他の群には羊や山羊や小羊の数がこれより多いのがあります。もし小羊が群から遠く離れると、ハサニーはバブリーを呼んで、その助けをかりて、その小羊を群の方へ連れてきます。

この群の中には mish もたくさんいます。小羊の母親のことをミーシュといいます。このミーシュたちの多くは小羊を生んでいます。そしてハサニーはかれらが新鮮な草を¹²⁾ 食べて大きくなるようにと、この山地の放牧地へ連れてきたのです。

ハサニーの家は村にあって、山地まで何ファルサング¹³⁾ かの道のりがあります。ハサニーは昼間は昼食のために村に戻ることはありません。なぜならいつも家畜の番をしていなければならないからです。ハサニーの妻は毎晩かれの弁当¹⁴⁾ を作ります。弁当とは食べ物をハンカチに包んだものです。ハサニーの昼の食事は、少量のパンとチーズとくるみです。かれの妻はそれらをハンカチに包み、かれのかばんに入れます。

真昼には太陽は真上にきます。ハサニーはハンカチを開いて昼食をとります。羊や山羊たちのなかには、木蔭の草の上に寝ているのがいます。またあるものはそろそろ歩きながら草をちぎって食べています。この写真をよくごらんください。山羊の唇は草を根の近くから食いちぎることができるになっています¹⁵⁾。だから山羊が一か所で沢山草を食べると、そこにはもう草が生えません。ハサニーは家畜を夏のあいだだけこの山地に連れてきます。

1) 「羊と子羊と山羊」 gūsfand-ān va barre-hā va boz-hā. 家畜の一種をとっても、その性別や年齢によって経済価値が異なる。だから例えば調査者が財産としての家畜の頭数を知ろうとするなら、家畜所有者の観念にある範疇に分けて質問しなければならない。だから「あなたは牛を何頭もっていますか」という質問はあまり意味がなく、答える方も当惑することがある。筆者がフェールス州ボレ・ノウ村で知った家畜の年齢別性別名称はつぎのようである。

	幼年期	思春期	成年期	
牛	gūsāle	noubār (または shangol)	gāv	
驢馬	korre	houli	khar	
羊	barre	shishak (または togholi)	おす ghouch めす mish	} gūsfand
山羊	kahre	kūlār	boz	

成年期の名称がその種類の総称ともなる。この地方では羊と山羊をあわせて gūsfand と呼んでいる。この村には馬はいない。

- 2) 動物が草を食うことを charidan という。
- 3) 「牧夫」 chūpān. 村民のもつ家畜を集めて預かり、放牧場へ連れて行って草を食わせる人。農民またはその子供が交替で勤務することもあり、また特定の人が職業としてこれに専従することもある。牛と驢馬を一群とし、羊と山羊をまた一群とする。村のだれかが多数の家畜を所有する場合、専属の牧夫（ひとりまたは複数）を雇用していることもある。この話の中の牧夫は地主に専属する何人かの牧夫のひとりである。農村において専従牧夫は耕作権をもたず、したがってその地位は耕作権をもつ小作人より低い。
- 4) Hasan が名である。名に縮小詞 -i を付けると愛情または軽蔑の意味をもつ。この場合 Ḥasani と呼ぶのは、牧夫に対する軽蔑の感情が入っている。
- 5) 動物の群を galle という。
- 6) sag-galle. 家畜の群を守るための犬である。遊牧民はかならずこの犬をもつ。しかし牧夫が村の近くで放牧し危険の少ないときは犬を必要としない。
- 7) babri. 「虎」の babr に愛称として i を付けたものであろう。
- 8) arbāb. mālek ともいい、地主であり、ときに多数の家畜の所有者でもある。これに対する小作人を ra'iyat という。arbāb は称号としても用いられ、この話では「ホセイン」という人なので Arbāb Hosein と呼ばれる。
- 9) 犬、熊、獅子などの子を tūle という。
- 10) ペルシア語では日本語ほど「貸す」と「与える」を厳密に区別せず、ともに単に dādan（与える）で表わす。「贈り物として与える」hadiye dādan という言い方は多くは使われない。
- 11) Bozorg-ash kard. 「それを大きくした」この-ash は人称接尾代名詞で、この類の代名詞は普通は所有格として使われるが、口語的表現では目的格としてもしばしば使われる。Ān rā bozorg kard. とするとより文語的となる。
- 12) Az 'alaf-hā-ye-tāze be khorand... 直訳すると「新鮮な草から食べて……」この前置詞 az（から）は部分を表わす。
- 13) farsang, farsakh といい。イランの古い距離の単位。らばが1日で歩ける距離で約6キロであるが、現在はあまり使われず、メートル法の普及で、キロが用いられている。
- 14) nān-picche. イラン人の「弁当」の中味はだいたいこのようなものである。くるみがないこともある。
- 15) 山羊（および羊）のこのような草の食いの特色を知ることにより、E. D. フィリプス著・勝藤猛訳『草原の騎馬民族国家』の監修者スチュアート・ピゴットの序文中のつぎの文章を理解することができる。「真の牧畜的遊牧技術は一種類でなく、何種類もの家畜の集合体でなければならぬ。そうすれば家畜の種類による草食の特徴を総合して、移動する地点ごとにあらゆる草を食いつくすることができるのである。すなわち牛と馬とらくだは長めの草を食い、羊と山羊は短い草を根もとから食うのである」

2. 次の放牧地

今朝、ハサニーは毎日と同じく早く起きました。朝食をとって家¹⁾を出ました。いつものようにバブリーを呼び、羊や小羊を連れて出発しました。しかし今日はほかの道を取りました。新しい放牧地へ行くつもり²⁾なのです。

何時間かののちハサニーと家畜の群は新しい放牧地に到着しました。この放牧地のまわりを大きな岩がとり囲んでいます。ハサニーはここでは羊や小羊をよくまとめて番することができます。

今ハサニーは立って家畜たちを見張っています。ときには周囲を見まわし、ときには山の頂きを眺めます。山頂は雪におおわれています。山岳地方の山頂は夏でも寒く、雪が融けません。下の谷間にはみな草や花³⁾が生えますが、山頂は谷間よりはるかに高く、草や花はありません。

羊や小羊は午後の何時間か草を食べました。それから細い流れのほとりへ行って、そのきれいな水を飲みました⁴⁾。羊は水を飲むとき、鼻先を水の中に突っこみます。かれらのあるものは水を飲んだあと木蔭に寝そべります。

太陽はしだいに西に傾きます。そのときにハサニーは家畜を村へ連れて帰るのです。坐っていたところから立ち上り、バブリーを呼びます。バブリーはいつものとおり、遠く離れている小羊を探しに行き、全員をミーシュと羊のところへ連れてきました。

この絵に見るように、ハサニーはバブリーを伴い、家畜を追って村に帰ってきます。まだ山麓から下りてきていません。この山岳地方にはときに狼⁵⁾が現れて家畜をおそいます。狼は羊の敵なのですが、犬を恐れます。狼が家畜に近づくと、ハサニーはバブリーの助けによりそれを家畜から追い払います。ハサニーはいつもあたりが暗くならないうちに家畜を村に連れ戻します。

夏の間ずっとハサニーの仕事はこれなのです。毎朝はやく家畜を放牧地へ連れていき、日暮れに連れて帰ります。ひとつの放牧地に長い間いることはありません。というのは羊がひとつの放牧地で草を食べたあとは、その放牧地にふたたび草が生えるまでしばらく時間が経たねばならないからです。

放牧地はみなイランのすべての人々のものです⁶⁾。いかなる家畜の群もあまり沢山そこで草を食べてはいけません。

わが国のある地方では、夏になると多くの部族が羊の群を連れて山岳地方へ行き、天幕を張ります。そして牧夫たちは羊や山羊の群を毎朝放牧地へ連れていき、夕方に天幕のところへ連れ戻します⁷⁾。

またわが国のある地方では、家畜所有者は羊や山羊を山岳地方へ連れていかないで、自分たちの住地の近くの丘に放牧地を見つけ、家畜をそこへ連れていきます。

またある地方では、羊や山羊の群を村から外に連れ出しません。村のまわりに放牧地をもっており、そこで家畜に草を食わせます。

しかしながらやはりイランの家畜所有者の多くは、自分の羊を山地の放牧地へ連れていきます。そしてイランの人びともまたたいていこの羊の肉⁸⁾を消費しているのです。

1) 原語は kolbe (粗末な家)、牧夫の住居だからである。

2) 「つもり」と訳した原語は *khāstan*。「欲する」と訳されるが、未来のことについて実現の可能性の大きなものの場合に使われるから「……するつもり」「……しようとしている」と訳すべきである。それに反して実現の可能性の小なる場合には *del khāstan* を用いる。

3) *gol o giāh* 「花や草」*g* の頭韻をもつ句としてよく使われる。

4) *Az āb-e-sāf-e-ān nūshidand*。「それ(細い流れ)のきれいな水から飲んだ」この *az* は前節の注12)に同じく、部分を指す。

5) *gorg* 「狼」は放牧される家畜にとってもっとも恐ろしい敵である。

6) 放牧地に対して所有権はない。ただし縄張りのようなものはある。使用権というべきものである。

7) これが遊牧民である。

8) 原文を直訳すると「この羊の肉から消費する」となり、上の 4) に同じ。

Ⅱ 丘の麓の生活

1. 牧 畜

ロバーベは10歳の少女です。父母と一緒に自分たちの農地の近く、丘の麓に住んでいます。ロバーベのお父さんの名はカルバライー¹⁾・アクバル²⁾です。カルバライー・アクバルは何頭かの牝牛をもっており、それは4年前に買ったもので、自分の土地の中で飼ってその乳を売ります。

牛小屋³⁾の戸があいて牛たちが外へ出てきました。ロバーベもいま家から出てきました。彼女は父とともに牛を放牧地へ連れていこうとしています⁴⁾。

カルバライー・アクバルは牛を放牧地へ連れて行ってその番をします。対頁の絵をごらんください。この絵から今が一年のうちのどの季節かということがわかりますか。春でしょうか、夏でしょうか、それとも秋でしょうか。もし冬だったら、雪がいたるところをおおい、地面は見えないし、木の枝もまったく葉がないでしょう。

牛たちはゆっくりゆっくり歩いて草を食べています。生え出たばかりの草が好きなのです。乾草もきらいではありません⁵⁾。牛は草を根のところから噛みきるではありません。というのは牛の唇は山羊の唇と違うからです⁶⁾。

ロバーベは牛たちが草を食べているのを見るのがすきです。しかし自分が牧草地の上を走って草を踏みにじってはいけないことを知っています。牛たちをいじめてもいけません。お父さんはこう言いました、牛を走らせるのはいけない、もし牛が走ると出す乳が減ると。

放牧地の向こうに小川があって、牛たちはそこで水を飲みます。牛は毎日たくさん水を飲まねばなりません。夜も牛小屋に水を置いておかねばなりません。

日差しはかなり暑くなりました。牛たちは木陰に寝そべっています。もしひどく暑くなければ、日の下に寝ます。牛の1頭が日の下に寝ているのが見えるでしょう⁷⁾。

他のものはゆっくりゆっくり歩いています。草をちぎって、噛むことなく嚥みこみます。牛が草を食うには、噛まないで、まっすぐに胃の中へ入れます。われわれの胃はひとつの部分しかありませんが、牛の胃には4つの部分があります。草は牛の胃の中で大変柔い塊の状態になります。この食物の塊を *noshkhār* といいます。

牛はしばらく草を食べたのち休息します。ときに木陰に寝そべり、ときにじっと立っていたりします。それからノシュハールのひとつを胃から口にもどしてきて噛みます。よく噛んだらもう一度のみこみます。

もしノシュハールをしない牛があると、この牛が病気になったことがカルバライー・アクバルにわかります。たぶん害のある草を食べたのでしょう。

カルバライー・アクバルの牛たちは他人の農地に入ることはできません。カルバライー・アクバルは自分の農地のまわりを柵でかこっています。牛たちは一日中放牧地の中におり、いつも番をしている必要はありません。

カルバライー・アクバルは牛を飼うために、一年を通じてほかの仕事ももっています。乾草をたくさん牛たちの冬のために用意しなければなりません。農地の一部にアルファルファ⁸⁾とクローバを植えてあります。ときどきそのアルファルファとクローバを刈り、一塊ずつ日に当てて乾燥させます。それからそれを乾草置場に運んで積み上げます。秋は乾草を貯蔵するときです。クローバやアルファルファやその他の草を家畜の冬の飼料として貯蔵するものを ‘alūfe といいま

す。今日はカルバライー・アクバルは牛小屋と羊小屋とでも仕事しなければなりません。牛小屋や羊小屋は清潔でなければなりません。なぜなら牛や羊の寝る所だからです。牛の乳を搾るのもそこです。夕方近くが乳を搾るときです。カルバライー・アクバルが牛たちを牧草地から連れて帰ると、牛たちはまっすぐに牛小屋の方に歩いていきます。牛小屋への道をよく知っているのです。またかいば桶の中にも食べ物があることを知っています。

牛は小屋に入ると、かいば桶に頭をつつこんで食べ始め、じっと立っています。カルバライー・アクバルは乳のバケツをよく洗って小屋にもってきます。牛のそばにうずくまり、バケツを牛の乳房の下に置きます。右手でひとつの乳房を、左手でもうひとつの乳房をつかみ、それらを親指と掌のあいだで圧力を加え、しずかに下の方へ引っ張るのです。

このふたつの乳房が空になると、もうふたつの乳房を手にとって搾ります。ロバーベはまだ乳搾りができません。しかし彼女の父はそれを教えてあげようと約束してくれています。彼女の手力が強くなったら、乳を搾ることができるのです。

カルバライー・アクバルは乳のバケツの重さを計ります。というのはそれぞれの牛がいくら乳を出したかを知らねばならないからです。もし1頭の牛の乳の量が少いと、その牛の飼料を変えます。もしそれでもこの牛の乳が少ないと、それを売り、その肉が食べられることになります。

1) Karbalāi は称号、シーア派の聖地カルバラ（今のイラク領）に参詣した人が附けるもの。メッカに参った人はいうまでもなく Hāji の称号をとり、イラン国内マシュハドにある第8代イマーム・レザーの廟に詣でた人は Mashhadi の称号をつける。

2) Akbar. 名である。イランのペルシア語で音節の最後にあるKの音は硬口蓋音、つまり前よりに発音されるから、日本語の「ク」よりも「キ」に近く聞こえる。Akbar は「アキバル」に近い。

3) 原語は āghol. ポレ・ノウ村の用法では牛と驢馬の小屋を tavile, 羊と山羊のそれを āghol という。

4) 「としている」に khāstan (欲する) が使われている。I の2の2) に同じ。

5) Az ‘alaf-e-khoshk ham bad-eshān ne-miāyad. これを言いかえると Az ‘alaf-e-khoshk ham khosh-eshān miāyad. または ‘Alaf-e-khoshk ham dūst dārand.

6) I の1の15) 参照。

7) Yeki az gāv-hā rā mibinid ke zīr-e-āftāb khasbide ast. ペルシア語の ke は接続詞である。英語による文法書には関係代名詞としての用法も示されていて、うしろから返って「……するところの」と訳しがちである。「日の下で寝ているところの牛の1頭をあなたは見るでしょう」と。しかし接続詞であるから都合のいい訳語を附ければよく、必ずしもひっくりかえって訳さなくてもいい。

8) yonje. 「アルファルファ」はイランでもっとも普及している牧草。一度種をまけば7～8年の間生育を続ける。1週間に30センチほど伸びる。「クローバ」は shabdar。

2. 牛 乳

今朝カルバライー・アクバルはもう1度牛たちの乳を搾りました。昨夜と今日の乳でふた罐が一杯になりました。その罐を驢馬¹⁾に積んで町に向かって出発しました。カルバライー・アクバルの家と農地は丘の裏にあります。

動物の通う道²⁾がその丘のそばを通過して町の方へ続いています。カルバライー・アクバルの隣人たちも、この道を通って町へ行きます。彼の隣人たちのあるものは彼より広い農地をもち、牛ももっと多くもっています。かれらは町に向かって出かけるとき、各人3頭の驢馬を連れ、みな牛乳を町へ運ぶのです。動物の通うこの道は曲りくねっており、上り坂も下り坂もあります。驢馬たちが町に着くのはとても遅くなります。だからカルバライー・アクバルとその隣人たちは毎日町へ行くことはできません。もしその道路が平坦で舗装されていたら、毎日早朝に新鮮な牛乳を町へ運ぶでしょうに³⁾。またみなで一緒にジープを買い、牛乳をそれで町へ運ぶことができるでしょうに。

カルバライー・アクバルはその乳をどこへもっていくと思いますか。この写真をよく見なさい。ここはアリー・アーガー⁴⁾のヨーグルト製造⁵⁾店です。アリー・アーガーは店の裏にヨーグルト製造工場をもっています。

毎朝、町のまわりのカルバライー・アクバルのような牛飼育者たちは、乳を驢馬に積んでアリー・アーガーのヨーグルト製造店へもってきます。アリー・アーガーのヨーグルト製造店は町の外の道路の近くにありますが。しかし町の中にもヨーグルト製造工場があります。自動車をもっている牛飼育者はまっすぐに町へ入ってきます。

カルバライー・アクバルは牛乳を売り、空の罐を驢馬にのせて家へ帰ります。その翌日でなく翌々日、罐にふたたび牛乳を満たして町へ運びます。ときどき、天気の良い日にロバーベは父とともに町へ行きます。

カルバライー・アクバルはときに一罐の牛乳を牛乳屋のためにとっておきます。牛乳屋は1週に1度、自転車⁶⁾にのってカルバライー・アクバルの農場へ来て、牛乳を買います。牛乳屋の罐は小さいもので、カルバライー・アクバルが彼に売る1罐で、牛乳屋の2罐を一杯にします。

牛乳屋は毎朝早く、白色の鞆袋⁷⁾を自転車の荷台にとりつけ、牛乳罐をその鞆袋に入れて出かけます。町の小路を通りながら笛を吹きます。牛乳の要る人は笛を聞いて、牛乳屋の来たことがわかります。牛乳屋を呼んで牛乳を買います。

ある村々では牛飼育者はけっして町へは行かず、毎朝、乳搾りのあと、牛乳罐を家の戸口に置いておきます。午近くになって自動車が町から来て、牛乳罐を集めて、牛乳殺菌⁸⁾工場へ運びます。この工場では牛乳をびんにつめて売ります。

カルバライー・アクバルの職業を牧畜業⁹⁾といいます。牧畜業者とは乳を供給するために牛を飼う人のことです。春と夏には牧畜業者の仕事はとても多くなります。牛たちの冬のためには乾草を用意しておかねばなりません。

1) 驢馬はもっともよく使われる運搬用の役畜で、小作人でも1頭はもっている。

- 2) jādde-ye-māl-rou. 自動車は通れなくて人間や動物の脚で歩く道。māl はモンゴル語・トルコ語とも共通で「家畜・財産」の意。それに対して自動車の通る道は jādde-ye-māshin-rou. (māshin 自動車< machine)
- 3) 道路の建設と自動車の普及は現在のイランでは急速に進んでいる。
- 4) ‘Ali Āqā. 「アリー」は名, 「アーガー」は名の後に附く敬称。姓の前にも附く。
- 5) 「ヨーグルト製造」 māst-bandi. (〔牛乳を〕ヨーグルトに固めること)
- 6) 「自転車」 dō-charkhe 「ふたつの輪のもの」という表現。
- 7) khorjin. 家畜の背の左右に垂らしてそれに荷物を入れるような袋。
- 8) 「殺菌された」 pāstūrizē<pasteurisé (パスツール氏殺菌法を施された)
- 9) dām-dāri (家畜を所有すること)

3. ヨーグルト製造

今日は金曜です。朝早くカルバライー・アクバルは罐を驢馬に積んで出かけました。ロバーベは、今日は父がいつもより遅く家に帰ることを知っていました。というのは金曜という日が買い物の日なのです。カルバライー・アクバルは牛乳¹⁾をヨーグルト屋に売ると、買い物に向かいます。塊砂糖、粒砂糖、紅茶、香辛料を調味料店²⁾で買い、1週分を整えるのです。

カルバライー・アクバルはヨーグルト店の傍で罐を驢馬から地面におろします。カルバライー・アクバルの隣人たちがひとりまたひとり到着して牛乳を運んできます。いく罐かの牛乳が店の中にあります。

さてヨーグルト製造人アリー・アーガーはこれらの牛乳をどうするのでしょうか。この頁の写真をごらんください。この大きな鍋の名は何というか知っていますか。「pātīl³⁾」牛乳回転⁴⁾器は⁵⁾こちら側にあります。アリー・アーガーはこれらの道具で牛乳からヨーグルトやチーズを作るのです。

まず牛乳をこの器に注いで回転させます。牛乳の表皮が分離します。牛乳はひとつの管から、表皮は別の管から、それぞれ別々の容器に流れ落ちます。

大鍋の下に火をつけ、回転された牛乳をその中に注ぎます。碗が並んでいるのをごらんください。これらは牛乳が沸騰⁶⁾するのを待っているのです。ラマザーン・ハーン⁷⁾はヨーグルト製造の職人です。大鍋のそばで牛乳を攪拌しています。牛乳が沸くと、ラマザーンはひしゃくで牛乳を大鍋から取り、如露に注ぎます。それから他の職人が如露で小碗・大碗⁸⁾に牛乳を満ちします。

いますべての小碗と大碗が牛乳で一杯になりました。しかしまだヨーグルトができたわけではありません。牛乳が少し冷えるまでしばらくそのままおいておかねばなりません。温度が少し下がると、ラマザーン・ハーンはしずかに上皮をスプーンで除けます。それからそのスプーンで種⁹⁾を少し小碗大碗の中に入れて、そっとまぜます。

種を入れてから小碗大碗に蓋をします。小碗大碗は徐々に冷やさねばなりません。そのためにそれらの下に暖い灰を入れます。翌朝その蓋を取ると、ヨーグルトで一杯です。牛乳がヨーグルトに変わったのです。

以前は¹⁰⁾ 何人かの運び屋がアリー・アーガーのヨーグルト店へやって来たものでした。めいめいいくつかの小碗や大碗を棚にのせて、近くの食料品店¹¹⁾ へもっていったものでした。しかしながらこのごろは食料品商またはその店員が自転車でヨーグルト店へ来て、大碗を何個か買っていきます。自転車にのっているこの人の絵をごらんください。何個の大碗を荷台にくくりつけていますか。

- 1) shir-hā と複数になっている。牛乳をふたつの罐に入れてあるからであろう。
- 2) ‘attāri. 砂糖・茶・香辛料など調味料を売る店。これに対し穀物・野菜・果物などを売る店を baqqāli という。ともにアラビア語。
- 3) ペルシア語会話で、質問に対する回答は必要な言葉だけでいい。だから「この大きな鍋の名は何ですか」と聞かれれば、「pātil」と一語で答えれば充分である。
- 4) 「牛乳回転器」charkh-e-shir. 回転するものが charkh である。車輪やミシンもそう呼ばれる。
- 5) 「は」と訳した原語は ham. 普通には「も」と訳される語であるが、ここは違う。「大きな鍋」に対して「牛乳回転器」を出してきたものである。歌謡曲の詞に次のようなものがある。

Ān rūz rūz-e-āshnāi あの日あなたと知り合って

Emrūz ham rūz-e-jodāi. 今日あなたはと別れの日

- 6) 「dāgh になる」dāgh は沸騰するほどの熱さ、garm はそれより温度が低く、「温い・ぬるい」に当る。
- 7) 「ハーン」khān はモンゴル語・トルコ語から来た敬称、名の後につける。
- 8) kāse と taghār. とともに主として陶器まれに木の碗、後者の方が大きい。後者はトルコ語。
- 9) māye.
- 10) 「以前は」ān vaqt-hā. 「このごろは」in rūz-hā.
- 11) baqqāli. 上の 2) 参照

III 平地の生活

1. 麦畑

ヘイダル・アリー¹⁾ が耕耘をしています。耕地の一隅がこの絵に見えます。次頁の絵がすべての耕地を示しています。ごらんください、土地は何とまっすぐで平らなことでしょう。この耕地の一片がヘイダル・アリーのものなのです。

春²⁾ の一日の朝です。気候はしだいに暖かくなっています。ヘイダル・アリーは土地を作付のために準備しています。鋤で土地をすき土をひっくりかえします。一対の牡牛³⁾ を鋤につないであります。自分自身は牛の後から歩いて、牛を操ります。イランの農民の多くは牡牛のことを varzāv と呼びます。ヴァルザーヴは農民の友達です。農民に多くの助けをします。ヘイダル・アリーは4頭のヴァルザーヴをもっています。

土が十分にすき返され砕かれると、ヘイダル・アリーと何人かの農民は一緒に種をまきます。種とは何か知っていますか。植えるべき粒のことを種といいます。ヘイダル・アリーとその協力

者たちは種をまきます。種をまいたあとはその上を土でおおわねばなりません。さもないと鳥や雀が食べてしまうからです。

それから耕地を灌漑します。灌漑とは作物育成のために乾いた土地に水をもたらすことです。

水が耕地に入ると、小麦の種は湿り、少しずつ伸びてきます。しばらくたつと、小さな茎が土から出てきます。しかしながら小麦のほかにしだいに雑草も生えてきます。ヘイダル・アリーは今年は雑草が少くなるように大いに努力しました。今朝、畑へ行ってみると、雑草があまり生えていなかったの、彼は喜びました。

ヘイダル・アリーは毎日畑を見に行きます。小麦がうまく育っているかどうかを見なければなりません。茎は日一日と長くなります。ヘイダル・アリーは今年は幸福です。昨年は水不足でした。しかし今年は水が充分あります。太陽の熱も小麦の成長をよく助けます。昼間、畑の土は充分に太陽を吸いこんでいるので、夜も暖いです。だから小麦は夜の間に成長するのです。

日々が過ぎていくにつれ、小麦の茎は高くなります。ヘイダル・アリーと彼の同僚は畑へよく出かけます。十分に監視しなければならないのです。ヘイダル・アリーとその家族は小麦を必要とします。小麦がかれらの食料なのです。ほかの何千という人々の食料も小麦で作られます。小麦の茎も家畜の餌になります。小麦や大麦の茎の小さく切れたものを *kāh*⁴⁾ といいます。

ヘイダル・アリーは牝牛のほかに牝牛も4頭もっていて、それから乳を得ます。これらはすべて冬に餌をもっていなければなりません。だからヘイダル・アリーは畑の一隅にアルフェルファと大麦を植えてあります。

ヘイダル・アリーは妻⁵⁾は家に20羽の鶏を飼っています。彼女の名はハーレ・ザフラー⁶⁾です。ザフラーは1日2度、鶏を見に行き餌をやります。鶏の餌は何か知っていますか。「āsh-e-morgh⁷⁾」。

大麦の粉と、乾いたパンをちぎったのと、ほかのいくつかのものを混ぜると、アーセモルグができます。しかし鶏たちはほかのものもたべます。例えば野菜、肉の屑、小米、粟などです。

ハーレ・ザフラーの牝鶏はみな卵を生みます。ハーレ・ザフラーは毎日きまった時刻に鶏の巣へ行って卵を集めます。それを村の食料品店⁸⁾へもって行って売ります。彼女はまた卵から雛をかえします。

1) Heidar 'Ali. この2語で名である。'Ali が姓ではない。農村などで姓を呼ぶことはほとんどない。

2) 春まき小麦の作付の話である。イランでは春まきより秋まきが多い。

3) 2頭の牝牛で耕作するのである。ただしこれは過去のことで、現在はトラクター *terāktūr* を賃借して耕耘させる。したがって農村で牝牛は種牛以外は不要になった。

4) 大麦 *jou* は家畜の飼料。小麦大麦の茎は脱穀(次節参照)のとき車輪によって小さくちぎられる。それを *kāh* という。

5) 「は」に当るのは *ham* で「も」の意である。IIの3の5)と同じ用法。ヘイダル・アリーの仕事に対して、今度は彼の妻は何をしているかを述べようとする。鶏を飼うのは女の仕事である。

6) *Khāle Zahrā, khāle* は「母方のおば」。Zahrāが彼女自身の名。「ザフラーおばさん」というのが彼女

の名だというのは日本人が考えるとおかしいが、彼女は誰かにそう呼ばれそれが村での通称になっているのであろう。

7) 必要な言葉だけで答えることはⅡの3の3)に同じ。

8) たいていの村に一二軒の店 dokkân がある。食料品店とは限らず、何でも屋である。

2. 脱 穀 場

夏が終に近づいています。小麦が十分に成長しました。その金色の茎の上に麦の穂が垂れ、吹いてくるわずかの風にもそよいでいます。

ヘイダル・アリーの仕事は小麦の刈取と脱穀のときにはとても多くなります。自分の畑の小麦を刈るほかに地主の畑の小麦も刈らねばなりません¹⁾。ヘイダル・アリーはひとりでもこれらの仕事をすべてするものではありません。ハーレ・ザフラーも彼を手伝います。麦刈労働者²⁾をも何人か雇って一緒に仕事するのです。

今日、ヘイダル・アリーと麦刈労働者たちは畑に来て刈取りをしています。この写真をごらんください。かれらは柄の長い鎌³⁾で小麦を刈っています。少し刈ると戻ってきて刈った小麦を束にします。幾束かの小麦がこの写真に見えます。麦刈労働者たちは日が照って暑いところで、汗を流しながら刈っています。かれらはこの仕事に熟練しており、素早く刈っていきます。何日かたつと刈取りの仕事が終ります。それから小麦の束を脱穀場へ運びます。脱穀場はとても固くて平たい一片の土地です。小麦の束をみんな脱穀場へ運ぶと、脱穀機⁴⁾で脱穀します。この頁の絵にひとりの農民が見えるでしょう。かれは脱穀機の上に坐って、脱穀場をぐるぐると回っています。ヘイダル・アリーの2頭の牡牛が脱穀機を引いています。小麦はしだいに脱穀機の車輪の下で粒を落とされるのです。

脱穀が終ると小麦を熊手で風選します。熊手とはシャベルの柄のような柄があり、その先がフォークのようにになっているものです。それでもって脱穀された小麦を空中に投げ上げます。小麦の茎は軽いので、風がそれを吹きとばします。小麦の粒は重いのでそのまま地面に落ちます。何日かたつと、小麦の粒は小山の形に積まれます。

このすべての小麦のうちでヘイダル・アリーの取り分は僅かです。穀物事務所の役人たちが畑へ来て、小麦を沢山買いつけます⁵⁾。穀物事務所の役人が買う小麦は、いくつかの町にある穀物倉庫⁶⁾に運ばれます。この頁に倉庫の写真があります。それは大きな建物で、小麦その他の穀物を貯蔵するものです。その中には機械がすえつけてあって、小麦を精製します。倉庫の労働者は小麦を粉にし、町のパン焼店に売って、人々のためにパンを焼かせます。

ヘイダル・アリーは自分の分の小麦を物置へ運びます。ヘイダル・アリーの物置は小さな部屋で、彼の家にくっついて作られています。次の頁の絵はすべての農地を示しています。ヘイダル・アリーの家もその中に見えます。この絵からわかるように、2筆の小さな農地にもアルファルファを栽培しています。ヘイダル・アリーのヴァルザーヴと乳牛のことを覚えていませんか。かれらの小屋はどこにあるでしょう。

ヘイダル・アリーの小屋⁷⁾は日干煉瓦と泥で作られています。ふた部屋しかありません。ヴェランダがこのふた部屋の前にあります。ハーレ・ザフラーはこのヴェランダで炊事をします⁸⁾。家の外、入口の前に沢山の樹木が生えています。これらの樹は強い風が家の中に吹きこむのを防ぎます。ときどきハーレ・ザフラーは薪が必要になると、これらの樹の枯枝を取ってそれで炊事をします。

ヘイダル・アリーは今年は昨年より早く、自分の小麦を挽きにもっていきます。村の水車⁹⁾は村の外に作られています。水車のある場所は坂になったところです。川の水はそこでは流れが速くなります。

- 1) 本文ではヘイダル・アリーの地位、つまり彼が自作か小作かわからない。かりに自作兼小作として、自己所有の畑および地主から耕作権を得ている畑で労働するのは当然であるが、地主固有の畑で労働する場合、それはおそらく賃労働であって、賦役労働 *bigāri* はイランではほとんどない。
- 2) *derougar. derou* (刈取) に行為者を表わす接尾語 *-gar* が附いたもので、「刈る人」の意であるが、イランではこれは麦刈のための日雇労働者を指す。これには他地方の農民が麦刈の期日のずれを利用して働きに出るものと、農民ではなくて雑多な日雇労働にのみ従事する人がある場合とあるようである。
- 3) 麦刈の鎌の刃は普通の刃であるのに対し、草刈鎌は鋸刃になっている。
- 4) 脱穀機 *kharman-kūb* は、薄い鉄の車輪(これを *charkh* または *disk<disk* という)を1列に8箇ほど、これを2列に並べ、その上の木の台に人が坐り、牛2頭に引かせて、刈った麦(穂と茎を分離しないままの)の上を回って麦の粒を茎から落とすのである。これも現在はトラクターが牛にとって代っている。
- 5) 政府は小麦の国内生産高の約10分の1を買い上げて、政府の消費や食糧不足期に備える。買い上げの対象は主として地主の持分の小麦であって、一般の小作人の取分となる量は家族をかううじて養う程度であって、供出する余裕はない。
- 6) 「穀物倉庫」 *silū<silō*。
- 7) 「小屋」 *kolbe*。I の 2 の 1) に同じ。一般のイランの家屋は日干煉瓦 *khesht* と、それを接着させるための泥 *gel* で作られる。イランの土は日本の土よりはるかにきめこまかくて粘着性がある。
- 8) イランの農民の家には台所などないのが普通である。
- 9) 麦の製粉には、水車のほか、シースターン地方では風車も用いられる。しかしこれらも機械化の傾向にある。

IV 荒野の生活

1. 荒野の狩人

アユビー氏¹⁾は荒野²⁾の狩人です。毎年、春の終に猟銃と旅行用具を自分のジープに積んで町から出かけます。彼の荒野の旅は10日より短いことはありません。アユビー氏はイランのすべての荒野を知っています。

今年はジャハーンビーン先生³⁾が彼に同行することになりました。ジャハーンビーン先生はア

ユービー氏の友人で、最近この町へやってきたのです。

ある日の朝、ふたりはジープにのって出発しました。何キロメートルか町から離れたところで、先生は言いました。「わたしはまだ荒野を見たことがないのです。今までたいてい山岳地方にいましたから。いつも一度でも⁴⁾いいから荒野の旅行をしたいと思っていました⁵⁾。荒野までまだどのくらい距離がありますか」

アユービー氏は言いました。「ねえきみ、前方をよく見てごらんよ。もう荒野に入っているのだよ」ジャハーンビーン先生がよくあたりを見まわすと、目の届くかぎり乾いた地面が見えるだけです。地面はだいたいどこも平坦で、ただ地平線の近くに山の遠景が見られるだけです。村もなく、人もいません。太陽ははげしく照りつけ、すべてを沈黙が支配しています。

狩人は自動車を止めました。下りてみるとあまりの暑さに数分以上は立って景色を眺めてられないほどでした。

先生は言いました。「わたしは今、荒野がどんなものかわかりましたよ。この乾いた地面に植物が何と少ないのでしょうか」

本当にその地面のどこにもただ小さな草が生えているだけでした。草はとてもまばらに生えていました。草と草の間には裸の地面以外の何も見えませんでした。

アユービー氏は言いました。「荒野ではたとい草が生えていても⁶⁾、それらの間隔が大きくあります。荒野の草はとても長い根をもっていて、広い場所を必要とします。これらの根はおのの地下で僅かな水を見つめます。根のほとんどは水を求めて地下何メートルも下りていきます。もしこれらの根が水に達しなければ、枯れてしまいます」

先生は草を見つけるたびに驚きました。なぜなら土地はとても乾いており、これらの草の根が地下で水分に到達しているとは信じられなかったからです。

再び自動車で乗って出発しました。アユービー氏は荒野のほかのところを先生に見せようと思いました。大変な土埃が自動車の後から舞い上っています。自動車の中は埃で一杯です。アユービー氏は先生の気をまぎらすためにこう言いました。

「イランの荒野にはいくつか種類があります。あるものを砂砂漠⁷⁾、あるものを塩砂漠といいますが。砂砂漠のうちのあるところでは、夏に非常に強い風が吹いて砂を動かします。突如として空が暗く⁸⁾なり、呼吸することも困難になります。らくだの列をつれて荒野の旅行をする人たちのことを *sārbān* (らくだ使い) というのですが⁹⁾、もしかれらがこの流砂に出会うと、行進を止めなければなりません。らくだたちは地面にひざまずき、サールバーンたちはその上におおいをかけます。自分たちも地面にひれ伏し、毛布を頭からかぶります。流砂のある荒野¹⁰⁾ にはいかなる植物も生育しません。イランの荒野でもっともよい季節は春です。なぜなら冬に雨が降り、土地が湿っています。それで春には荒野は草で一杯になり、あるところでは草花も生えます」

1) *Āqā-ye-Aiyūbī*. *Aiyūbī*は名でなくて姓、*āqā*は姓に付けられるときは前にくる。ところで今までに出てきた人名、ハサン、ロバーベ、アクバル、アリー、ラマザーン、ヘイダル・アリーはすべて名であったのに、ここで姓が出てきたのはなぜか。元来、イラン人には他のイスラム教徒と同じく姓がなかった。

先王レザーシャーの治世にヨーロッパにならって姓を用いることが始まったが、現在なお農村では名のみが呼ばれ、姓はほとんど使われない。しかし都市では姓を呼ぶのが一般的となっている。この話に出てくるアユービー、ジャハーンペーン両氏とも都市の住民である。

- 2) 「荒野」 biābān. bī (なし) āb (水) ān (ところ) という構成の語で、人の住まない平原をいう。これに対して人の住んでいるところは町でも村でも ābādi という。
- 3) Āqā-ye-Doktor Jahānbin. 医者であろう。
- 4) 「一度でも」 yek bār ham. ペルシア語の ham は日本語の「も」に近い。例えば man ham (わたくしも), bāz ham (それでも), sad ham (百もの)
- 5) 「[私は]……してみたいと思っていた」 del-am mikhāst... 実現の可能性の少ないことを望むときの表現。I の 2 の 2) 参照。
- 6) agar rostani-hā-i dide shavad. 「もし植物(複数)が見られても」複数形の「植物」rostani-hā の後に -i がついているのは、「荒野には植物が少ないが、かりにそれがあるとしても」というニュアンスを与える。
- 7) 「砂砂漠」とは変な日本語であるが、ペルシア語では shen-zār(砂の多いところ), 英語で sand desert である。「塩砂漠」は shūre-zār. salt desert である。日本語の「砂漠」は sand desert だけを指している。
- 8) tire o tār. tire も tār もともに「うす暗い」の意。t の頭韻をふんでいる。
- 9) 複数名詞の次に ke がくるとき、ふたつの用法がある。名詞に -i がつくのとつかないのとである。ここのはついていない。Sārbān-ān ke hamrāh-e-qatār-hā-ye-shotor dar biābān-hā mosāferat mikonand, agar... ここで sārbān-ān (らくだ使いたち) に -i がなくて ke につながっている。このときはこの複数名詞の全体が意味される。ここでは「らくだ使いたち——それはすべてらくだの列をつれて荒野の旅をする人なのであるが——がもし……」という意味になる。
- 10) これに対して複数名詞の後に -i がつけば、全体のうちの部分を表わす。Biābān-hā-i ke rig-e-ravān dārand... 「荒野のうちで流砂をもつものは……」9) の用法を関係代名詞 ke の敘述的用法とするなら、10) は限定的用法といえよう。

2. 荒野のなかの集落¹⁾

何時間か車を走らせたのち、アユービー氏とジャハーンペーン先生は、さきにその遠景が遥かに見えていた山の近くに達しました。先生は言いました。「乾いた荒野にも草花が生えることをわたしはまったく知りませんでした。その色は何と鮮やかで輝いていることでしょう。何と互いに近く接して生えていることでしょう」

荒野の狩人は言いました。「ねえきみ、ここは山の近くですよ。気候は春には少しおだやかになります。雨水は乾いた土地を潤おします。雨が止むとたちまちこれらの草が土から頭を出します。しかしながらまたとても早く無くなってしまうのです。もうちょっと遅く荒野へ来ていたら、これらの花はなかったでしょう。花々は急速に種となって枯れてしまうからです。草花が枯れると、荒野はふたたび裸となり、こんなところに一時は草花が生えていたなどとだれも信ずることができません。今は夏に入ったばかりです。とても暑いでしょう。荒野のどこでも、よく見ると

蜃気楼²⁾が見えます。地質学者によれば、この荒野全体は遠い昔には塩湖だった³⁾そうです。それから湖の水がしだいに干上り、その塩分が地中に残ったのです。このような昔の湖を干いた湖と呼んでいます」

このように話をしているうちに、山の近くを通りすぎて、遠くに円蓋のようなものが見えていたところに到着しました。先生は尋ねました。

「村に着いたようですね。低い円蓋が向こうに見えますね」

アユービー氏は言いました。「遠くに見えるあの円蓋は給水塔の屋根なのです。この土の道は隊商の通る道です。この道にはずっとかなりの間隔をおいていくつかの給水塔が建っています。その昔、らくだの隊商とともに旅行した人たちは、疲れてのどが渴いたものです。かれらはこのような給水塔にたどりつくと、休息して水を飲み、再び出発したものでした。しかしこの給水塔はもうひとつの効用をもっています。それは道しるべなのです。隊商の人たちはつねにこれらの円蓋に気をつけていなければなりません。ひとつの給水塔を通りすぎると、何ファルサングかの中には次の給水塔にたどりつかねばなりません。もしそうでなければ、道に迷ってしまいます」

先生は言いました。「たしかにイランの昔の人たちは隊商のことを考えていたわけですね。まったくこの荒野で道を知っていなければ、迷ってどこへもたどり着かず、飢えと渇きで死んでしまいます。わたしたちは朝から今まで何時間も自動車で走っていながら、まだ集落に到着していません。らくだの隊商に加わって旅をした人は何と忍耐と辛抱をしたことでしょう」

荒野の狩人は言いました。「あなたももう少し辛抱なされば、この村に着きますよ。これが夜を過ごす最初の村なのです。この村へ着けば緑色の植物が見えます。その緑の植物はなつめやしの木⁴⁾です」

この村に住んでいる人々もごく小さな畑をもっています。この村の景色はたいへん見ごたえがあります。乾いて暑い荒野のただ中に緑豊かな村が見えてきました。その近くの山から小川が村の方へ流れています。川の水は平地に達すると地中にしみこみ、川はしだいに小さくなり、ついには何にも残らなくなります。

この小川のほとりに緑の植物が生えています。しかしながらそこから少し遠ざかると、ふたたび乾燥した土地です。荒野のなかで緑の植物が生えているところはどこでも、そこには水があり集落があると信ずることができます。イランのあらゆる荒野を通じて、このような集落はごくわずかです。したがって人間も荒野にはあまり住んでいません。

ときに人々は荒野の一隅に井戸を掘って水に達します。ときに荒野の丘の麓で泉が地から湧き出ています。要するにどこでも水さえあれば、集落があり、人間も生活できるのです。

しだいにその村に近づきました。かれらは道路の土埃と気候の暑さで疲労していました。ジャハーンビン氏は言いました。「今この村に着くとして、夜はどこに寝ればいいのでしょうか」

アユービー氏は言いました。「あなたも当然ご存知のとおり、このあたりにはホテル⁵⁾や宿屋はありません。だから茶店で寝なければなりません。明朝また朝早く出発しなければなりません。ここからはそろそろ獲物が見つかるでしょう」

1) ābādi で biābān (荒野) に対するもの。人の住むところで、集落、町、村などと訳してよい。

- 2) sarāb. 地平線上の山や樹などが浮き上って見え、その下に湖があるように見える。
- 3) daryāche-ye-namak būde ast. 「塩湖であった」時制は現在完了である。その理由は、話者がこの荒野が塩湖であった当時のことを直接には知らないからである。もし知っていれば、時制は būd と過去となる。
- 4) nakhl. イラン南部に多い。その実を khormā といい、食用にする。非常に甘い。
- 5) イランでは宿泊所につきの3段階がある。
 mehmān-khāne (客の家)——hotel ともいう。いわゆるホテルに当る。
 mosāfer-khāne (旅人の家) 上のより下等なもの。部屋とベッドだけある。
 qahve-khāne (コーヒー店) chāy-khāne (茶店) ともいう。茶店兼食堂で宿泊も可能である。

3. 荒 野 の 動 物

翌朝まだ太陽が上らぬうちに、アユービー氏とその友人は、朝食をとったのち出発しました。しだいに暑くなっていました。荒野は依然として静かで穏やかでした。

荒野の狩人が言っていたように、ちょっと村から離れると、もはや植物はありませんでした。目の届くかぎり、平坦で乾燥した土地が見えていました。太陽はしだいに上ってきました。空には一片の雲もありませんでした。ジャハーンビーン氏はちょっと考えてからアユービー氏に言いました。「あなたは今までちっとも狩猟の話をしていませんね。この水の少ない荒野に一体¹⁾動物がいるのですか。こんなところにはどんな動物も住めないように思いますが」

アユービー氏は言いました。「それどころか、イランの荒野には動物は少なくないのです。水があるところには植物が生えます。また植物のあるところには動物が住むことができます。実をいうとわたしはもう狩猟をしないのです。若いときにはよく狩りに行ったものでした。けれどもこのごろはもう動物を殺すのが好きではありません。わたしの考えでは狩りはいい遊びではありません。そのうえ狩猟をすることは動物の子孫をたやすことになります」

ジャハーンビーン氏はアユービー氏の言うことに驚いて言いました。「それなら、あなたは毎年町から出て荒野へいらっしゃいますが、それは何のためですか。鉄砲なんかももったりして²⁾」

アユービー氏は言いました。「わたしはイランの荒野が好きなのです。わたしの考えでは、この乾いた平坦な荒野ほど見て楽しいところはありません。イランの荒野の空は、夜はとても美しいです。わたしは毎年この荒野を通ります。鉄砲をもっているのは安心のためなのです」

たしかに荒野は音もなく静かなように見えます。しかしながらその全体を通じて沢山の動物が住んでいるのです。その動物のうちの一種はイランの荒野だけのもので、jeirānという名のかもしかです。ジェイラーンの群は、水や草のあるところを求めて草を食べます。そしてその水たまりが干上って草がなくなると、移動して他の地へ行きます。ジェイラーンかもしかはとても速く走ります。もし狩人が自動車ですれを追いかけると、時速70キロで走ることがわかります。

イランの荒野には熊や豹や狐もいます。爬虫類も少なくありません。とかげのあるものは荒野にいて、その長さは1.5メートルにも達します。この動物はもし何者かを恐れて逃げ道がなくな

ると、尻尾の助けて跳びかかって襲ってきます。小さなとかげも沢山います。これらはとても速く這うのでなかなか見ることができません。それらは岩の隙間や草の下にかくれています。この爬虫類の多くは土色をしており、もし動かなければまったくそれを見つけることができません。

鳥も荒野には沢山います。鳥の食べ物は荒野の虫や草の実です³⁾。爬虫類やほかのいくつかの荒野の動物は、夜だけ隠れがから出てきます。というのは荒野は昼間はとても暑く、夜になると涼しくなるからです。

太陽は空の真中に上ってきました。強い風が吹いて土や砂を空に舞い上げています。アユービー氏はしばらく黙っていましたが、こう言いました。「わたしたちは今日の昼に次の村に着きます。そして午後と夜は⁴⁾そこにとどまらねばなりません。この風は今夜まで続くでしょう。明朝また出発してこの荒野の端まで旅を続けることにしましょう」

1) 「一体」と訳した語は *magar*。これは話者が自分の考えと逆のことを表現して質問する場合に使われる。ここでは話者は、荒野に動物はいないと思っていて「いるのですか」と聞くので *magar* を付けてあるわけである。

2) *Tofang ham ke hamrāh miāvarid*。この文で *ke* はなくても意味は通じる。「あなたは鉄砲ももっている」*ke* があると訳文のようなニュアンスになる。

3) 直訳すると「荒野の虫や草の実からである」となる。この「から」に当る *az* は I の 1 の 12) のように部分を表わすものと考えてもよいが、ここでは種類を表わすと考えたい。「……等々」を *az in chiz-hā* (このものたちの種類) という。

4) 「午後と夜は」*ba'd az zohr o shab rā*。この *rā* はなくてもいいが、「明日には風が止むだろうが、今日の午後と夜はだめだ」という気持ちで、「午後と夜」の後に *rā* をつけて強調してあり、日本語の「は」がびったり当る。宮田泰雄「ペルシア語の後置詞 *-rā* について」(西南アジア研究20, 1968年)参照